

2006年10月12日



# 資料館通信 第59号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館 埼玉県ふじみ野市長宮1-2-11 TEL 049-261-6065  
大井郷土資料館 埼玉県ふじみ野市大井中央2-19-5 TEL 049-263-3111



江戸時代の瓦灯(左・小林茂氏蔵)と  
埼玉県最古<室町時代>の瓦灯(右・ときがわ町円通寺蔵)



大井・亀久保のつのや前での婚礼  
<左右の子供が松明を持つ>

上福岡歴史民俗資料館

大井郷土資料館

特別展

## 昔の照明と暮らし

11月19日まで 開催中

企画展

## 大井のつのや (曲り屋)

11月1日~  
12月3日まで 開催

両展示会の主な展示内容として、市立上福岡歴史民俗資料館の特別展は本号2~3頁、市立大井郷土資料館の企画展は本号4~5頁に紹介しています。

第21回  
特別展

# 昔の照明と暮らし

平成18年9月29日(金)～11月19日(日)

展示コーナーは、Ⅰ照明の原点、Ⅱ出土品にみる灯火具と幻の瓦灯、Ⅲ照明道具の発展、Ⅳ近現代における照明の変化、Ⅴ祭りのおかり、Ⅵ照明のある風景、Ⅶ懐かしい暮らしの道具に分けている。展示資料は約400点、主会場は上福岡歴史民俗資料館。福岡河岸記念館内でも「福田屋のおかりと暮らし」展を開催。

## 入り口のシンボル展示

当市の特徴にもなっている新河岸川舟運に関係する船問屋や船着場「河岸」で使われた照明具のうち、鶴河岸（現富士見市）の軒灯と明治37年志木河岸での軒灯の写真パネルを入りに展示。その脇には、今回の展示品で、じかにさわられるレプリカの瓦灯と小田原提灯を配置。

## 発火具と幻の瓦灯

大昔から人々の生活の中での「火」は、調理、暖房、照明として使われた。発火の方法では、木の棒や板をこすりあわせ、その摩擦熱を利用して火を起していた。平安・中世遺跡から火打ち金が出土し、江戸時代通じて数多くの火打ち金を使用された。その後は、付け木やマッチが普及していった。今回の特別展資料のうち、伝世品としては最古になる室町時代の瓦灯が比企郡ときがわ町に所在していたので借用展示。このほか、江戸浅草の今戸焼製と思われる瓦灯が荒川沿いの熊谷・川本・秩父などに所在していた。そのため瓦灯は、江戸期の今戸焼製と思われる秩父の小林茂氏コレクションのものを展示。

## 油の照明

菜種油や綿実油などを使い、灯明皿・ひょうそく・アンドン・瓦灯・夜学灯などに油を入れた灯火具。油が染みとおるように灯芯というイグサのなかごを使い、押さえとして陶器や金物製が使用された。

油の照明具には大小あり、床に置くもの、壁にかける各種の用具があった。市域の福岡河岸福田屋醤油・酒醸造店の大きな蔵のともしびに使われていた陶器製タンコロという灯火具が、未使用のまま裏に包まれて発見された。現在本館蔵で、これの一部を展示している。市域の農家ではランプが入ってから、針仕事や台所で油のおかりを使っていた。

今回は、主に川越市在住の松本敬司氏コレクションから掛け灯・各種のひょうそく・角行灯・掛行灯・行灯皿・灯芯押さえなどを借用展示。

## ろうそくの照明

中世には松脂ろうそくを使い、江戸時代には「はぜ」や「うるしの実」からろうをしほる方法が発達し、明るさも、アンドンの2倍であったので多くの家で利用されていた。

ろうそくの照明具は、屋内で使う燭台、手燭のほか、掛け燭は秩父の水車小屋で使用されたものもある。屋外では、懐中電灯代わりの弓張り提灯・箱提灯・小田原提灯・蔵提灯・ガンドウなど多岐にわたっている。提灯に赤く「こんばん」と書いてあるコンバンチョウチン。結婚式にも使う定紋の付いた弓張り提灯は、普段提灯箱に入れ玄関先に常置し、福田屋のものは明治4年購入の箱書きがある。新河岸川舟運の夜間航行用として荷船のガンドウ、川越藩の御用船では御紋（三つ葉葵）入り高張提灯と手提灯を使っていた。前者の



夜学灯(小林茂氏蔵)



荷船用は展示しているが、後者の御用船の提灯は残されていない。小田原提灯は携帯用で、童謡の「おさるのかごや」の「エーッサ エーッサ エッサホイサッサ」という歌詞に盛り込まれている。

## 石油の照明

石油ランプは文明開化の象徴。この石油を使い、くそうず灯台、置きランプ、台ランプ、豆ランプのほか、吊るものや掛けるものの中には、手提げのランプやカンテラがあった。

ブリキのカンテラの用途には、漁撈用のヒブリがある。火が付いたものを下げ、夕方から夜にかけて用水路や田んぼでドジョウをとった。

市域では、福田屋など一部の商家は台ランプ、ほとんどの農家は吊りランプを使っていた。ホヤのガラスには、すすが付着し黒くなってしまい、子供たちの手が小さいので掃除が日課であった。豆ランプは、風呂場や手元の照明で、これらの部品は消耗品ですぐになくなり、二分シン・五分シン・ランプのホヤなどを福岡河岸の吉野荒物屋から購入していた。

## 電灯の照明

市域で一番早く電気を引いたのは、ハケ地区（福岡河岸）の福田屋で大正2年の電灯使用史料が残っている。同地区以外の電気の供給は、大正6年川越街道沿いの高階村（現川越市）から福岡村と大井村へ、そのほか古市場・渋井（現川越市）から新河岸川を越えて市域の福岡村滝に入り、中福岡から福岡新田に、水天宮から駒林、下福岡へと通じて行った。

ここに電気を引いた武蔵水電株式会社の工事の際には、電気会社の人と地元の農家が動員され、馬車に5～6間<10.8m>の長さの電柱と部品を積み、これらの運搬や電柱の穴掘りも地元民が行う。電柱の費用は地元負担になり、電柱の設置場所を一定の間隔で深さ5尺<1.5m>くらい掘り柱を建てる。電線を張る経費は会社負担。当時の村人が、多額の費用を出し合っても夜の明るさを電灯に求めたのは、新しい生活への期待と喜びがあったからこそ、みんなで力を合わせたのであろう。

大正15年以降は、東京電灯株式会社川越出張所からの電気供給になった。夕方暗くなった頃電気が付き、台所で10燭（約12ワット）、座敷の一部屋で16燭（約20ワット）を使っていた。当時は、電気会社に代わって福岡村青年会が、電気代の集金を昭和初期まで徴収していたという。

電灯をともすことができなかつた時代が、昭和16年以降の灯火管制により終戦までの日々にあった。太平洋戦争で日本本土への空襲の始まりによって、防空訓練が盛んに行われ衣食住全般にわたりきびしい制限が強いられていた。その一つが電灯のあかりを屋外にもらさないことで、電灯の笠に黒布をかけたり、電球を黒く塗ったり、さまざまな遮光カバーを使っていた。長い照明の歴史のなかで、「明かりを灯してはいけない」という受難の時代であった。戦後は、平和復興により新しい照明が普及していった。



無尽灯(松本敬司氏蔵)

## 特別展の記念講演会および関連講座

	日時	演題・講座名	講師
①	10月15日(日) 午後1時30分～3時30分	特別展記念講演会 「照明の道具—小林コレクションから—」	小林 茂氏 (埼玉民俗の会会長)
②	10月29日(日) 午後1時30分～3時30分	講座「上福岡の照明の歴史」と展示見学会	橋本祐可子・他 (本館学芸員)
③	11月5日(日) 午後1時30分～3時30分	講座「中・近世の照明—考古資料にみる—」	小林 克氏 (東京都写真美術館学芸員)
④	11月11日(土) 午後1時30分～3時30分	体験事業「小田原提灯づくり」	小川町和紙体験学習センター スタッフ

①～③参加費無料。④は定員12人で材料費1,500円。申込・問い合わせは上福岡歴史民俗資料館まで



平成18年度  
企画展

# 大井のつのや おらあぼうの曲り屋

平成18年11月1日(水)～12月3日(日)まで開催

人間生活のもっとも基本である衣食住のうち住、住まいの変ほうはめまぐるしいものがあります。

日本の農村の原風景といわれた草葺きの民家が市内にも数多く見られました。かつては大半が農業を営んでいましたが、首都圏30km圏内という立地条件のもと、都市化が積極的に進められ、都心への通勤人口が増加するにつれ、その生活様式も様変わりを強いられてきました。社会構造による急変等の中、農業生活様式の家屋は次々とその姿を消し、今風の新しい建物やマンションにとってかわられるようになり、昭和30年代から40年代にかけて急速に改築・改造がすすめられ、古い民家は壊滅状態にあります。今ではふじみ野市内でも草葺きの古民家は数軒しか存在しなくなりました。

そんな民家の中に旧大井には「つのや」とも「かぎや」とも呼ばれる曲り屋が存在しました。今はすべて消滅してしまい、原形を目にすることはできませんが、かつて亀久保地区の「つのや」に光をあて調査をした記録が残されていました。

ここ大井郷土資料館が消滅したつのやに関する記憶を将来に残すために、今回平成18年度の企画展としてそのつのやについての記録保存の展示会に取り組みました。

本企画展を通じてかつて亀久保や大井地区に存在したつのやについて、記憶の一端に書き加えていただけましたら幸いです。

## 展示資料一覧

資料名	年代・出土地点	所蔵者等
亀久保村復元絵図	昭和47年	ふじみ野市教育委員会
大井宿模型	昭和63年	当館蔵
居屋敷地実地明細帳	明治6年	新井喜久治氏
出火大類焼覚帳	明治14年	当館蔵
当座附込帳	明治15年	小林成吉氏
金銀出入帳	明治17年	小林成吉氏
墨書「十一屋」銘染付磁器爛徳利	大井宿遺跡第9地点出土	ふじみ野市教育委員会
墨書「十一屋」銘銅版転写染付磁器爛徳利	大井宿遺跡第9地点出土	ふじみ野市教育委員会
墨書「十一屋」銘灰釉染付磁器大皿	大井宿遺跡第9地点出土	ふじみ野市教育委員会
上絵付「十一屋酒店」銘染付磁器薄手酒杯	大井宿遺跡第9地点出土	ふじみ野市教育委員会
つのや写真	青木家・稲吉家・久保家・小暮家・鳥田家・西山家	嶋村徳樹氏
スケッチ	小暮家・横山家	嶋村徳樹氏
平面間取り図・配置図	久保家・小暮家・鳥田家・鈴木家・三上家・横山家	嶋村徳樹氏

企画展記念講演会

「つのやについて考える」

講師：嶋村 徳樹 氏

日時 11月12日(日) 午後1時30分～3時30分

会場 市立大井郷土資料館 2階 研修室

入館料 無料



横山氏宅(南より)



久保氏宅(西より)



西山氏宅(西より)

<原画・写真共に嶋村徳樹氏蔵>

休館日 11月6・13・20・27日(月)  
開館時間 平日 午前9時30分～午後6時  
土・日・祝日 午前9時30分～午後5時

問い合わせ先  
大井郷土資料館  
☎263-3111

## 三富巡回文化財展示会のお知らせ

三芳町から所沢市にかけて広がる三富開拓地割遺跡は、今から300年前の計画的な新田で、現在も整然とした美しい景観が残されています。

5年前から埼玉県・ふじみ野市・川越市・狭山市を含めた5市町で三富地域を歴史分野からPRする展示会を行っています。

今年度は、「おいでよ三富 寺社めぐり」と題して三富地域内の寺社30か所を紹介する展示です。特に今回はA2判の両面カラーリーフレットを作成し、無料配布します。三富地域の散歩に活用願えれば幸いです。

なお、大井郷土資料館での展示期間は平成19年2月24日(土)～3月7日(水)の10日間です。どうぞ、ご期待ください。



## ■ふじみ野市の両資料館への資料の寄贈■

平成17年12月から平成18年9月まで次の方々より各種の文化財資料を寄贈していただきましたので、紙上をもって厚くお礼申し上げます。

### 市立上福岡歴史民俗資料館分

平成17年

12月22日 大正博覧会施本・日本外史等和本  
市内 島村一夫氏

平成18年

1月15日 簾屋当時の印半纏とモモヒキ  
富士見市 小杉 弘氏

2月19日 古アイロンと福岡村当時の家電品  
のカタログ  
市内 田川カツ子氏

5月25日 福田屋関係婚礼打ち掛け  
市内 村田和子氏

6月16日 造兵廠（火工廠）関連品の落下傘  
と箱、軍隊リュック  
川越市 桜井佐一氏

7月27日 茶や農業用の竹籠、肥桶  
市内 鈴木敏夫氏

8月23日 造兵廠の解散式記念椀（箱と3組  
の木椀）  
杉並区 阿部トヨ氏

9月17日 ヤネヤのハサミ  
市内 富田 宏氏



造兵廠解散式の記念椀

＜昭和20年8月上福岡の陸軍造兵廠の解散式の時、菊花の漆椀（底部に「造兵廠マーク」入り）が配られた。寄贈者は、造兵廠川越製造所長神田正憲中佐のお子さんである＞

### 市立大井郷土資料館分

平成18年

4月6日 市沢観音講関係資料（観音講テ  
ープ・打敷・風呂敷・太鼓・道具箱・  
鑿子・燭台・花瓶・お供え入れ・  
掛軸・香炉・鑿子台）

市内 市沢観音講中

4月25日 ステレオ

市内 齊藤卯太郎氏

5月24日 万石・篩・唐箕・ローラー・フリ  
マンガ・ツブッテコシ・カメノコ・  
稲刈り機・羽釜

川越市 田中秀明氏

7月21日 子ども神輿

市内 大井上組



市沢観音講中道具

◆そのほか、昨年の合併に伴い、両館で旧上福岡市・旧大井町時代に使われていた旗・印鑑・地図・館名板・航空写真・文書等および合併広報用旗・幕・ステッカー等の歴史資料を収集した。